

My Town
わが街

My Friend
わが友

Mari
マリ

CHRISTINE
クリスティーヌ



6

六本木②

ることもしばしばだった私にとつて、安らぐことができるとても頼りになる方でした。後にはおいしいピクルスが出来上がるのです。

お店のあった斜め前には今も東京の少数派として生活している小さなインターナショナルコミュニティが生ま

れがあります。今そのコミュニティが大きな輪となつて、東京のあちらこちらを支えています。宗教対立がよく話題となります。宗対立がよく話題となります。宗教対立がよく話題とな

その地下を貸してもらい、ユタヤ風ピクルスを作っています。大きな日本の酒樽を並べ、その中に新鮮なキュウ

リ、香辛料を交互に重ね、上に落としぶたをのせ 一週間

（異文化コミュニケーション）

ユタヤ風ピクルスを作っています。大きな日本の酒樽を並べ、その中に新鮮なキュウ

リ、香辛料を交互に重ね、上に落としぶたをのせ 一週間

（異文化コミュニケーション）

ユタヤ風ピクルスを作っています。大きな日本の酒樽を並べ、その中に新鮮なキュウ

リ、香辛料を交互に重ね、上に落としぶたをのせ 一週間

（異文化コミュニケーション）

ユタヤ風ピクルスを作っています。大きな日本の酒樽を並べ、その中に新鮮なキュウ

リ、香辛料を交互に重ね、上に落としぶたをのせ 一週間

（異文化コミュニケーション）

ユタヤ風ピクルスを作っています。大きな日本の酒樽を並べ、その中に新鮮なキュウ

リ、香辛料を交互に重ね、上に落としぶたをのせ 一週間

上智大学に行き始めたころ、六本木の「アンディンケン」というニューヨークデリスタイルのサンドイッチ屋さんによく行きました。店名にもなっているアンディンケンさんという女性は、帽子作りの職人で、ニューヨークのお店を閉めて旦那さまと一緒に日本に来て帽子専門のブティックを開いていました。正田美智子（現皇后）さまの帽子を作ったこともあるそうです、



ピクルスで交流 港区で

それが彼女の誇りでした。その後ご主人と別れ、サンドイッチ屋を開きました。彼女は「日本のユタヤ人の母」といわれていました。日本で言う肝っ玉母さんみたいな人で、いろいろな方の面倒をよく見ていました。私もとてもかわいがっていただきました。大学は夜学だったので、通学前に彼女のところへ寄ると、いつも懐かしいニューヨークサンドを食べさせて

安らぎの肝っ玉母さん

全10話